

The Portrait of a Lady における Isabel Archer のコスモポリタンとしての経験

名前 杉山未菜実

1. *The Portrait of a Lady* の結末に関する先行研究の概観と問題点

The Portrait of a Lady (1881)の結末は、長年にわたり批評家たちを困惑させてきた。なぜなら、本作の結末において、ヒロイン Isabel Archer は、苦痛に満ちたローマでの結婚生活から逃れる機会があったにも関わらず、あえてその不幸な生活に戻るという選択をするからである。Isabel がローマに戻る決断をするとき、“She had not known where to turn; but she knew now. There was a very straight path” (402)と作者 James は語る。この「まっすぐな道」という表現は、Isabel の選択に何らかの正当性があることを示唆しているが、James がその理由を明らかにしないため、読者には自己破滅的にもみえる Isabel の選択になぜ正当性があるのか判然としないのである。Patrick Fessenbecker は、この結末についてのこれまでの解釈を三つの視点で分類している。すなわち、“mistake”(Isabel の選択を誤りとみなす論)、“explainable”(環境などの外圧が Isabel に自己破滅的な行動を強制したとみなす論)、“justifiable”(哲学的概念や心理学的理論などを用いて、Isabel の行動が彼女自身の複雑な内面や価値観に基づいた合理的なものであったとみなす論)という三つの観点である (70-75)。しかしながら、本論で強調したいのは、Isabel の最後の決断を誤りであるとしたり、外的要因によって説明可能であるとしたりする多様な論の多くが、物語から適切な引用を抜き出してくることができれば、十分納得がいくものであるということである。そこで本論では、このような多様な解釈の可能性を残した作者の意図を探り、オープンエンドの物語の解釈を成立させる新たな論を提示した。そのために本発表では、Fessenbecker でいうところの“justifiable”論の立場をとり、Henry James (1843-1916)のコスモポリタンという主体像と実兄 William James (1842-1910)のプラグマティズムという哲学的な理論を枠組みとして使用した論を展開した。

2. Henry James のコスモポリタン像

Henry James のコスモポリタン像は、経験に基づいた知識の構築と真理の変容性を重要視する、兄 William のプラグマティズムと深く共鳴している。アメリカ人 Isabel が経験したような、ヨーロッパへと渡る異文化経験について、Henry James は自身の紀行文 “Occasional Paris” (1878)の中で“cosmopolite (「コスモポリタン」)”という言葉を用いて彼の考えを表し、自身の考える「コスモポリタン」像を、文化には文化の数だけ長所が存在すると理解できる人と定義している (129-130)。また、紀行文の序文の締めくくりとして、James は、異文化経験を重ねることのできた “eyes attuned to a different pitch” (130)で以て、既知の文化を観察し直すことで、新たな印象を得ることの必然性について記述している。つまり、James の理想とする「コスモポリタン」とは、主体の経験に応じて、文化の認識が変わってゆくことを当然の事実として受け入れることのできる人物なのである。それはまさに、William James のプラグマティズム—「最後のもの、結実、帰結、事実」に注目し、抽象的な理論や仮説よりも実際の結果や具体的な事実を重視する哲学的姿勢 (『プラグマティズム』44)—と通底する。James が理想とする国際人の在り方とは、古典的なコスモポリタン像—一個人の帰属意識が家族から始まり、隣人、地域集団、民族的・言語的・歴史的アイデンティティに基づく集団へと同心円状に広がり、そして、最終的に人類全体を包含する単一の大きな円を形成するもの (Berman 430-431)—とは特徴を異にする。それは、流動的でより複雑な同時代に適応したプラグマティックなコスモポリタンといえるものなのである。

3. Isabel の成長—理念主義からプラグマティックなコスモポリタンへ

The Portrait of a lady は、Isabel のプラグマティックなコスモポリタンへの成長を描いた物語であり、James が結末で多様な解釈が可能な形で描いたのは、それらの解釈が示す複数の不快な現実を彼女が直視し、それら全てを自身の経験として受容したことを示唆するためである。

Leon Edel が主張するように、Isabel は、自己の無限なる成長を夢見、そしてそれがアメリカ人ならば実現可能であらねばならないと考えている (16)。財産も地位も所持しないが、“sensitivity” (184) だけは豊富な Gilbert Osmond を Isabel が結婚相手として選択するのも、より自由で無限の成長の可能性を好むアメリカ人の個人主義・理念主義に基づく判断であり、物語終盤まで苦痛を感じながらも Osmond との結婚生活を続けるのも、結婚は反故不可能の聖なる誓いでなければならないという理念に縛られているからである。

理念を重視する Isabel の姿勢は、固定的で抽象的な理念だけでは「汗と塵」(『プラグマティズム』44)、すなわち行動と経験で構成される現実世界を把握するのは不可能であるというプラグマティズムのそれと大きく異なる。

個人主義に基づいた自己実現の追求は、個人の自由と自立を重視し、自己の成長と幸福を優先することを意味する一方で、結婚という聖なる誓いの遵守は、個人の自由よりも義務や責任を重視し、他者との関係を優先することを求めるため、Isabel の掲げる二つの理念は相反してしまう。Tessa Hadley は、文化が作りあげた理想の女性像と個人主義という“a treacherous double bind in contemporary imaging of the female” (619) が Isabel を苦しめると主張し、ジェンダー論に基づき論を展開するが、Isabel は、そのような女性に対する社会的な期待やジェンダー規範という外圧に苦しめられるのではない。彼女は、自らが抱く矛盾する理念の狭間で心を引き裂かれており、ここで描かれているのは現実を顧みない理念第一主義のような思想が生んだ Isabel の内的葛藤の問題なのである。「こうあるべき」という思考は、Isabel に不快な現実を自身の経験として甘受させることを拒否させ、Henry James の理想とするコスモポリタンへの成長の道を妨げているのである。

一方で、Isabel の Osmond のもとに戻るという自己破滅的な選択は、実は彼女がプラグマティックなコスモポリタンへと成長する可能性を示唆している。最終章の Casper Goodwood のセリフに着目すると、そこには、彼女がこれまで目を逸らしてきた不快な現実—子供を生後 6 カ月で亡くしてしまったこと、知人と夫の不貞関係、夫の意思に反して従弟に会いに来てしまったこと—が示唆されている。James は Goodwood のセリフを通じて、Isabel に不快な現実を直視させ、それらを自身の経験として引き受ける機会を与えるのである。つまり、Isabel が Goodwood との対話の後に決断する、Osmond のもとに戻るという自己破滅的にも思える選択は、ヨーロッパでの経験を通じた成長と複数の現実受容の結果であるといえるのではないか。「まっすぐな道」が暗示するのは、逃避せず現実を直視するプラグマティックな態度の獲得と、経験から学んだ結果として選択した道筋を表しているのである。

3. おわりに

The Portrait of a lady は Isabel がプラグマティックなコスモポリタンとして成長する過程を描いた作品であることを論じた。物語の序盤こそ、Isabel はアメリカ的な理念主義の精神のもと、自己実現への強い願望を抱いているが、ヨーロッパでの経験を通じて彼女は変化していく。James が提唱する、経験主義的アプローチ・固定観念の否定・多様性と変化の受容を特徴とするプラグマティックなコスモポリタン像を体現したヒロインへと変化するのである。

参考文献

- Baym, Nina. “Revision and Thematic Change in ‘*The Portrait of a Lady*.’” *Modern Fiction Studies*, vol. 22, no. 2, 1976, pp. 183-200.
- Berman, Jessica. “Modernist Cosmopolitanism.” *A History of the Modernist Novel*, edited by Gregory Castle, Cambridge UP, 2015, pp.429-448.
- Bowden, Edwin T. *The Themes of Henry James: A System of Observation through the Visual Arts*. Yale UP, 1956.
- Edel, Leon. “*The Myth of America in The Portrait of a Lady*.” *The Henry James Review*, vol. 7, no. 2-3, 1986, pp.8-17. *Project Muse*, 10.1353/hjr.2010.0230.
- Fessenbecker, Patrick. “Freedom, Self-Obligation, and Selfhood in Henry James.” *Nineteenth-Century Literature*, vol. 66, no. 1 (June 2011), pp. 69-95. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/10.1525/ncl.2011.66.1.69>.
- Hadley, Tessa. “‘Just you wait!’: Reflections on the Last Chapters of *The Portrait of a Lady*.” *The Portrait of a Lady*, edited by Michael Gorra, W. W. Norton, 2018, pp.613-627.
- James, Henry. *Collected Travel Writings: The Continent*. The Library of America, 1993.
- . *Autobiographies*, edited by Philip Horne, The Library of America, 2016.
- . *The Portrait of a Lady*, edited by Michael Gorra, W. W. Norton, 2018.
- James, William. *Pragmatism, a New Name for Some Old Ways of Thinking; Popular Lectures on Philosophy*. Longmans, Green, and Co., 1907.
- . *Psychology; Briefer Course*. Harvard UP, 1984.
- Lubbock, Percy, editor. *The Letters of Henry James*. Scribner, 1920.
- Tintner, Adeline R. *The Cosmopolitan World of Henry James: An International Study*. Louisiana State UP, 1991.
- VanSlyck, Phyllis E. “Isabel Archer’s ‘Delicious Pain’: Charting Lacanian Desire in *The Portrait of a Lady*.” *American Imago*, vol. 70, no. 4, 2013, pp.633-661.
- ジェイムズ、ウィリアム『プラグマティズム』、梶田啓三郎訳、日本教文社、1960年。